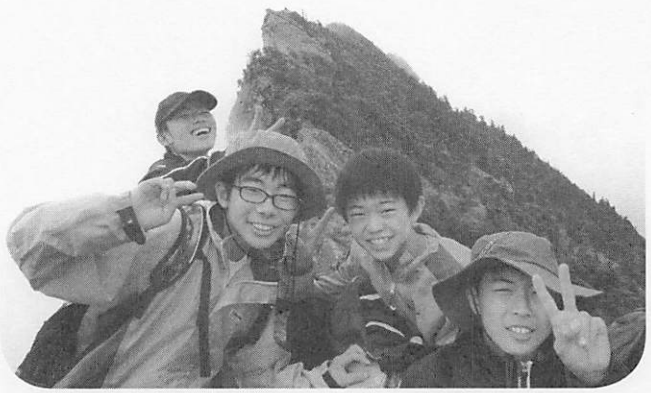
第Ⅲ部
研究の総括







第１章　学校評価

１　はじめに

本年次研究を学校評価（全校生徒・保護者へのアンケート，教員の自己評価）の結果から見取る。またその際，項目によって昨年同時期（10月）の学校評価と平成28年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果を参考にする。

アンケートの質問項目は，本校の教育目標「自立と共生の力をもつ生徒の育成」の具現化を図り，その達成状況や達成に向けた取組の適切さなどについて具体的な評価指標についてそれぞれ評価するために設定した。その中から，本校の今年度の研究実践の有効性について考察できると考える質問項目を選び，その結果を以下にまとめる。

２　全校生徒・保護者へのアンケート，教員の自己評価から

それぞれの評価の数値は，評価基準を４段階で設定してアンケート調査を行い，その平均値を求めたものである。生徒および保護者のアンケートでは，４（そうだと思う），３（だいたいそうだと思う），２（あまりそうだとは思わない），１（まったく思わない），０（分からない）と設定し，教員の自己評価では実施率または達成率で，４（80%以上），３（70%以上），２（60%以上），１（60%未満）と設定している。また総合評価は，生徒，保護者，教員の評価平均値が3.0ポイント以上でA，2.5ポイント以上でB，2.5ポイント未満でCとしている。

(1)　意欲的な学習活動の推進について

資料１より，①～③のいずれの項目も3.1を超える高評価になっている。このことは，前次研究に引き続いて，持続可能な社会の形成にむけ，自立と共生の力の育成に取り組んできた成果と考える。また，③の項目では教員の評価が0.5ポイント上昇するとともに，生徒の評価も0.2ポイント上昇していることから，探究心を高揚させるような教材や題材，学習展開の工夫などの研究推進の成果と考える。一方，②の項目では，教員の評価が0.3ポイント上昇しているのに対し，生徒は0.1ポイント下落していること，また，④の項目で教員の評価が低いことから，「論理的に思考し表現する場」を設定した授業実践が行われるようになったものの，生徒はこれを実感できていないことが分かる。そこで今後は，生徒自らが「育った，伸びた」と感じられるような学びの振り返りの在り方を研究していく必要がある。

具体的な評価指標	評価			
	生徒	保護者	教員	総合
① 基礎・基本を確実に定着させるための学習指導を行うことができたか。	3.2 (3.1)	3.1 (3.1)	3.2 (3.1)	A (A)
② 基礎・基本を活用し，論理的に思考し表現する場（学び合い）を設定し，思考を広げ深め合う手立てを工夫することができたか。	3.1 (3.2)	3.2 (3.2)	3.2 (2.9)	A (A)
③ 学ぶ楽しさ（探究心の高揚）を味わわせるために学習のねらいに応じた指導を工夫することができたか。	3.4 (3.2)	3.2 (3.1)	3.3 (2.8)	A (A)
④ 学びの振り返り（自己評価）を行い，生徒自らが「育つ・伸びる」指導改善に向けて工夫することができたか。	3.3 (3.4)		2.7 (2.7)	A (A)

上段は本年度，下段（ ）内は昨年度の数値を示す。

資料１　生徒・保護者へのアンケート，教員の自己評価（その１）

(2)　主体的な生徒活動の推進について

資料２より，⑤・⑥のいずれの項目も3.1を超える高評価になっている。とりわけ生徒の評価が高い。このことは，各教科で培われた「きょうどう」の精神を学校行事等でも発揮しながら，自尊感情が醸成され，多くの生徒が自信と誇りをもって活動していることを示していると言える。

具体的な評価指標	評価			
	生徒	保護者	教員	総合
⑤ 学校行事等において生徒が自信と誇りをもち継続して挑戦するための手立てを工夫することができたか。	3.4 (3.5)		3.1 (3.1)	A (A)
⑥ 学校行事等において仲間と共にやり抜く場を設定し，自己実現に向けて切磋琢磨できるための手立てを工夫することができたか。	3.5 (3.6)	3.1 (3.5)	3.3 (3.3)	A (A)

上段は本年度，下段( )内は昨年度の数値を示す。

資料２　生徒・保護者へのアンケート，教員の自己評価（その２）

(3) 充実した道徳教育の推進について

資料３より，⑦～⑨のいずれの項目も教員の評価が低いが，生徒，保護者の評価は高い。とりわけ項目⑧の生徒の評価は3.7を示しており，前項(2)の結果とともに，「きょうどう」の精神を発揮し合い，互いを尊重する支持的風土のある集団づくりをしてきた成果と考える。一方，本年度は道徳の教科化へ向けての校内研修を進めてきたが教員の評価がおおむね低い。道徳の評価の在り方など，更に研究を積み重ねていく必要があると考える。

具体的な評価指標	評価			
	生徒	保護者	教員	総合
⑦ 生徒が有用感を感じる道徳の時間の指導の工夫をすることができたか。	3.2 (3.3)	3.1 (3.2)	2.8 (2.2)	A (B)
⑧ 仲間意識を高め，互いを認め合い，励まし合う支持的風土のある集団づくり（学級・学年等）のための手立てを工夫することができたか。	3.7 (3.7)	3.3 (3.4)	3.1 (2.8)	A (A)
⑨ 他者との学び，他者からの学びによる自己理解や他者理解を深めるための手立てを工夫することができたか。	3.4 (3.4)		3.0 (2.8)	A (A)

上段は本年度，下段( )内は昨年度の数値を示す。

資料３　生徒・保護者へのアンケート，教員の自己評価（その３）

３　全国学力・学習状況調査の結果を踏まえて

資料４より，どの項目も１と２で回答する生徒は，全国の割合より大きい。このことからも本校の生徒の自尊感情が醸成されていることがいえる。しかし，本校で設定した評価０（分からない）が多いことは，十分には自尊感情が醸成されていないことの表れと思われる。生徒一人一人へきめの細かい支援が必要であると考えるべきではないだろうか。

質問事項 選択肢　１：そう思う　２：どちらかといえば，そう思う　３：どちらかといえば，そう思わない　４：そう思わない　０：その他	選択肢				
	1	2	3	4	0
⑩ 物事を最後までやり遂げて，うれしかったことがある。	83.2 (72.7)	12.7 (21.5)	2.4 (4.3)	0.9 (1.4)	0.9 (0.0)
⑪ 難しいことでも，失敗を恐れないで挑戦している。	42.7 (19.0)	40.7 (50.5)	11.6 (26.2)	2.2 (4.2)	2.8 (0.0)
⑫ 自分には良いところがあると思う。	31.5 (27.5)	45.9 (41.8)	11.0 (21.3)	3.9 (9.3)	7.8 (0.1)

上段は本校生徒対象のアンケート結果，下段( )内は全国学力・学習状況調査の全国の結果の割合(%)を示す。

資料４　生徒アンケートおよび全国学力・学習状況調査の全国の結果

４　おわりに

「自立と共生の力をもつ生徒」の育成の推進により，生徒の探求心を高め，主体的に学習に取り組み，更に「きょうどう」の精神を発揮しながら「学び合い」をしてきたことが，生徒の自尊感情の醸成につながっていることが学校評価からも見取ることができた。今後は，生徒の思考の広がりや深まり，成長や伸びが実感でき，更に学ぼうとする意欲を高めることにつながる支援の工夫や評価の在り方が必要になると考える。

第２章　１年次研究のまとめ

１　論理的に思考し表現する力の育成に関して

まず，本校が今年度進めた言語技術教育について，生徒の意識調査（**資料１**）から考察する。意識調査は７月と12月に実施した。

	アンケート内容 ※回答　４（そう思う）　３（だいたいそう思う） ２（あまりそう思わない）　１（まったくそう思わない）	「４」・「３」と回答した生徒の割合（％）							
		１年生		２年生		３年生		全　校	
		７月	12月	７月	12月	７月	12月	７月	12月
①	問答ゲームで質問に答えることが好きである	81	85	82	88	85	88	83	87
②	問答ゲームで質問にすらすらと答えられる	59	63	70	80	81	89	70	77
③	問答ゲームで質問をすることが好き	81	81	79	80	86	88	82	83
④	問答ゲームでうまく質問ができる	63	55	69	69	75	83	69	69
⑤	学級でのスピーチで，発表をすることが苦手だ	36	46	47	47	35	43	39	45
⑥	学級でのスピーチで，内容を分かりやすく伝えられている	61	57	63	63	72	74	65	65
⑨	各教科の授業で調べたことや考えたことを説明することが好きである	76	66	73	74	70	79	73	73
⑩	各教科の授業で調べたことや考えたことを上手く説明できている	61	62	66	61	68	76	65	66
⑪	相手に分かりやすく伝える力が高まっている	90	91	77	88	88	92	85	90
⑫	木曜の朝の時間（言語技術教育）で学んだことが，学習や生活などで役立っていることがある	「はい」として事例を挙げている生徒の割合（％）							
		76	87	71	80	61	80	69	82

資料１　言語技術教育に関するアンケート（一部抜粋）

考　察

○言語技術を習得・活用する学習について，生徒の80％以上がその有用性を感じる（質問⑫）とともに，自らの表現力が高まっていると実感している（質問⑪）ことから，言語技術教育の推進は，「論理的に思考し表現する力」の育成に有効な手立てであると判断できる。

○学年が上がるにつれて質疑応答の質が向上している（質問②・④）。これまでの本校の学習経験が関わっていると考えられる。各教科で育成された思考力や表現力は，汎用的な能力として発揮されることがより明確となった。

○質問①～④にて筋道を立てて発表したり，スピーチしたりすることを苦手とする生徒は「恥ずかしい」等の内面的なことと併せて，自らの言語技術に関する能力・技術不足について記述していた。このことから，言語技術を培う学習の重要性及び今後さらに充実させる必要性が明らかとなった。

○思考することや表現することは「好き」であるが，なかなか思考が深まらなかったり表現することが苦手と感じている生徒が少なからずいる（質問⑨・⑩）。これらの生徒は，個別の知識を組み合わせたりまとめたりして表現することに課題があることが分かった。思考や表現を支える個別の知識の習得についても着実な取り組みが必要であることが再認識された。

○高まった力（質問⑪）を発揮させ，生徒自らが実感できる場の保障・充実に努める必要がある。これにより，表現することに自信をもち（質問⑥・⑧），苦手意識を払拭（質問⑤）していくことにつながってくると考えられる。

また，学校全体として設定した「論理的に思考し表現する力」の育ちを見取るために，「問答ゲーム」や「テキストの再構成」を活用し，評価規準の検討，ルーブリックの作成等を行った上で，客観的にその育ちを見取った。

【6月実施】テキストの再構成

問：次の文章を論理的に整った文章に修正しましょう。
「この間，買い物に行ったとき，うっかり忘れてきてしまったらしいのですが，不便だから取りに行こうと思っているようです。かわいそうだから一緒に行ってあげようかと思っているのですが，Bさんも一緒に行きませんか」

ルーブリック

評価A	評価B	評価C
6W1Hが明確になっており，重複している情報がない。論理的に考えてつじつまが合っている。	6W1Hのうち分からない点がある。3人の主語が書かれており，一文が短く端的である。	主語が書かれておらず，だらだら文である。つじつまが合わない。

【7月実施】問答ゲーム（記述）

問：次の題についてのあなたの考えを，読んだ人が納得できるように書きましょう。
題：夏に旅行するとしたら，山がいいですか，それとも，海がいいですか。
ルーブリック：
①「結論」→「理由・根拠」→「まとめ」の構成で欠いている
②二つ以上の「理由・根拠」をナンバリングを使って書いている
③夏に選んだ方に行く「理由（根拠）」が明確に書かれている
評価A ①～③がすべて満たされている　B ①と②が満たされている
C ①または②が満たされていない

【9月実施】問答ゲーム（記述）

問：次の題についてのあなたの考えを，読んだ人が納得できるように書きましょう。
題：学校での読書は，「毎朝10分間」と「週に一度の50分間」では，どちらがいいですか。

（ルーブリックは，P16の通り）

【実際の評価】

6月　テキストの再構成

学年／評価	1年	2年	3年	全校
A	17%	30%	66%	37%
B	55%	52%	24%	44%
C	28%	18%	10%	19%

7月　問答ゲーム（記述）

学年／評価	1年	2年	3年	全校
A	32%	35%	61%	42%
B	21%	49%	24%	32%
C	47%	16%	15%	26%

9月　問答ゲーム（記述）

学年／評価	1年	2年	3年	全校
5	10%	14%	8%	11%
4	24%	21%	23%	23%
3	22%	37%	27%	29%
2	35%	14%	17%	22%
1	9%	14%	25%	16%

資料2　言語技術教育の実践における評価の実際

1学期は，3段階評価で実施したが，7月の生徒の記述状況を踏まえ，実際の評価がしやすく，また，一人一人の生徒への指導をより個に応じたものにするとの観点から，2学期以降は5段階評価とした。5段階評価のルーブリックを作成する際は，7月の生徒作品を持ち寄り，次の手順で作成した。

① 課題を実行し多数の児童生徒の作品を集める。
② 一つの作品について少なくとも3人が読み，それぞれ，他の採点者に分からないように採点する。
③ 全部の作品を検討し終わった後で全員が同じ点数を付けたものを選び出す。
④ その作品を吟味し，それぞれの点数に見られる特徴を記述する。
⑤ 各点数の特徴を示す典型的な作品を選び出し，それを完成したルーブリックに添付する。

このルーブリックづくりは，8月の研修職員会にて実施し，各学年ごとに作成した。作成されたルーブリックの例はP16のとおりである。教師が様々議論しながら，ルーブリックを検討したことにより，本校で育てたい「論理的に思考し表現する力」がより明確となるとともに，生徒の育ちの状況や以降の教育活動の方向性についての共通理解を図ることができた。作業も40分程度で効率的に進めることができた。各教科等でも積極的にルーブリックづくりを行うことができた。今年次研究の一つの成果である。

考　察

○１年生は，Ａと評価される生徒が増加している一方で，Ｃと評価される生徒も増加している。力の育ちに差が見られるのが現状であり，格差が生じはじめてきたとの懸念もある。Ｃと評価された生徒への指導を充実させることはもちろんであるが，「すべての生徒」の「論理的に思考し表現する力が育成」できるよう，言語技術教育の在り方や評価問題及びルーブリックの再検討を行わなければならない。

○２年生は，若干ではあるが全体的にＣ→Ｂ→Ａの方向に推移している。しかし，評価１・２の生徒は存在しているため，個に応じた指導を心がけ，全生徒がＢ以上の評価となる実践を積み重ねたい。

○３年生は，９月にＡと評価できる生徒が激減し，Ｃと評価しなければならない生徒が増加している。これは，１学期の評価基準が曖昧だったため，１学期の評価が適切に行われていなかったことが要因であると分析している。３年生も２年生と同様に全生徒がＢ以上の評価となるよう，特に現状において，評価Ｃの生徒に対する指導を確実に行わなければならない。

一分間スピーチや各教科等での生徒の学習状況を見ると，言語技術教育の成果が現れている状況が確認できる。その状況の一端は，本稿の研究の実際等で示すとおりである。ルーブリックづくりを含めて，次年度以降も言語技術教育を進め，その指導を充実させていきたいと考えている。また，その考え方や手法を各教科等で活かす，学習指導方法の在り方についても，さらに研究実践を進めていきたい。

２　研究主題の具現化に関して

教科領域で様々なＥＳＤの視点に立った問題解決的な学習の在り方について研究・実践を進めてきた結果，確かな生徒の育ちを見取ることができた。研究が進むにつれ，各教科領域ともにＥＳＤの視点をより明確にし，なおかつ「『自立』と『共生』の力が育つ」学習指導について，その精度を上げていくことができた。「逆向き設計論」を踏まえた指導計画に基づき「何をどうすることが生徒の資質・能力が育つことにつながるのか」，パフォーマンス評価等を基に「資質・能力は本当に育ったのか」など，「持続可能な社会を支えていくために必要な『自立』と『共生』の力が育つ教育活動を展開するために」を常に意識し，そして生徒の育ちの姿にこだわって研究を進めてきた。また，「きょうどう」を明確にすることにより，教師，生徒ともに「何のためか」を理解した学習活動の重要性を，生徒の姿から再認識することもできた。

各教科等で着実な実践を重ねたことにより，自らを活かすことが，課題の解決，及び，よりよい集団（社会）の形成につながり，自己の成長につながる，との実感を多くの生徒にもたせることができた。このことは，本校の「望ましい子ども像」に掲げた「○○しようとする生徒」を育成する上で大きな意味をもつ。それは，「自分を活かす」ことが，「自らの学び」や「他者の学び」にとって非常に大切であることを認識できるようになったからである。特に論理的に思考しそれを分かりやすく表現することについては，言語技術教育の成果もあり，「根拠をもとに表現」「学んだことを活かして表現」ということと併せて自然とできるようになってきた生徒が随所に見られるようになった。それに伴い，学び全体の質の向上をもたらしている。技術を身に付け，そして「自分を活かす」ことの意味や意義への自覚の高まりを生徒にもたらしたことは，ＥＳＤの目標に掲げられた価値観や行動の変革に資する成果であるとも言える。

次期学習指導要領の改訂に向けた議論においても，「育成すべき資質や能力の育成」やその手段としての「アクティブ・ラーニング」が話題に上がっている。このような状況の中で，課題は残っているものの，ＥＳＤの視点にたち，生徒の主体的な学び合いを通して，次代のよりよい社会を生涯にわたって支え続けることができるような資質・能力の育成にこだわってきた本校の研究実践は有意味なものであると実感している。

お わ り に

３か年継続研究の１年次がスタートしました。多くの皆様のおかげをもちまして，研究成果をご報告できますことに深く，感謝申し上げます。

本校では，2010年から研究主題「持続可能な社会を築くための，自立と共生の力を育む指導」を研究テーマに掲げ，本校の教育活動をＥＳＤの視点で捉え直し，「人と人とのつながり」「人と自然とのつながり」「人と社会とのつながり」を重視する教育活動を展開してきました。特に2013年からの研究では，「社会の中で活きて働く実践力としての自立と共生の力が育つ効果的・効率的な指導」として「きょうどう」（共同・協同・協働）の精神を発揮した生徒同士の学び合いを授業の中心に据えた学習活動が有効であるとの研究成果を得ることができました。

そこで，今年次からの研究においても，「きょうどう」の精神に発する生徒同士の学び合いをさらに充実させるということを念頭に置き，研究主題を「持続可能な社会を支える資質・能力の育成ー論理的に思考し表現する学び合いを通してー」としました。

現在の我が国は，グローバル化の進展や人工知能（ＡＩ）の急速な進化など，社会の様々な領域で，激しい変化が加速度的に進んでおり，将来を予測することは難しくなっています。そのような時代の変化を背景に次期学習指導要領の改訂が進み，2015年12月に出された中教審の答申では，「社会の加速度的な変化の中でも，社会的・職業的に自立した人間として，伝統や文化に立脚し，高い志や意欲をもって，蓄積された知識を礎としながら，膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し，自ら問いを立ててその解決を目指し，他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められる。」としています。

本校では，他者と「きょうどう」しながら共通のねらいに向かう学びの質を高めるために，今年次は言語技術を用いて「論理的に思考し表現する力の育成」に力を入れました。生徒たちは学習活動のみならず，いろいろな場面でその成果を発揮しました。11月８日に行われた創立70周年記念式典・記念行事の生徒による意見発表では，各学年それぞれの発達段階に応じて，聞くものを納得させる説得力のある意見発表をし，これからの附属中生の在り方について，新しい価値を見い出す意見交換が行われました。今後も自分の将来を見据え，持続可能な社会を志向し行動することを「価値」として自覚させる研究を進めていきたいと考えます。

生徒の育ちを励みとして真摯に研究に取り組む「チーム附中」は，本日，第96回愛媛教育研究大会に参加いただき，賜りました貴重なご意見・ご指導を２年次研究に生かしてまいりたいと存じます。

最後に後援をいただきました愛媛県教育委員会，愛媛県市町教育委員会連合会，松山市教育委員会，愛媛県小中学校長会，愛媛県教育研究協議会をはじめ，ご指導・ご支援いただきました多くの先生方に衷心より感謝申し上げますとともに，今後とも本校教育の推進にご支援・ご協力をお願い申し上げます。

2017年２月

愛媛大学教育学部附属中学校　副校長　渡　部　ゆかり

研究アドバイザー

愛媛大学教育学部　教授　城戸　　茂

研究同人及び愛媛大学研究パートナー

校　長　小助川　元太　　副校長　渡部　ゆかり

教科領域	研　究　同　人	愛媛大学研究パートナー
国　　語	細川　美保・大上　航太 丸山　佑樹	小助川元太・三浦　和尚
社　　会	西田　剛志・田中　寿佳 宮本　真人	鶯原　　進・川岡　　勉・川瀬久美子 張　　貴民
数　　学	冨永　剛志・宇都宮憲二 山本　泰久	安部　利之・河村　泰之・吉村　直道
理　　科	岡本　慎次・辻井　　修 森山由香里	佐野　　栄・中本　　剛・細田　宏樹 山﨑　哲司
音　　楽	来嶋　英生	井上　洋一・楠　　俊明
美　　術	大川　博司	秋山　敏行・福井　一真
保健体育	坪内　道広・古澤　龍也	糸岡　夕里・日野　克博
技　　術	斧　　純司	大西　義浩・森　慎之助
家　　庭	土手　佳代	竹下　浩子・藤田　昌子
英　　語	濵田眞基子・河野　圭美 河野　　操	池野　　修・立松　大祐・富田　英司
行く河	山口　京子	上田　敏子・日野　克博

(50音順)

表紙絵に寄せる思い

こもれび ～若葉の小路～

３年　高橋あずさ

松山市の中心に位置し，松山城のお堀に囲まれた堀之内公園。
お堀の外側は，車の交通量も多く，ビルなどの人工物があふれています。
時間の流れも心なしか速く感じます。
お堀の内側は，豊かな緑や静かな空間が広がり，人や生き物たちが集っていて
のんびりとした時が流れるオアシスのようです。
お堀の内側の遊歩道より一段高いところにある小路。
私が堀之内公園で最も描きたいと思ったのはこの場所でした。
この小路には，みずみずしい若葉の間から心地よい光が差し込んでいます。
人の心を癒し，やさしく包み込んでくれる“こもれび”。
どこからともなく私たちを見守ってくれているようです。
新聞を読む人，散歩する人，お弁当を食べる人，ハーモニカを吹く人……。
この風景を描いているとき，いろいろな人に出会いました。
「ここは自然によって創り出された，みんながリラックスできる空間なんだ！」
自然には人々の心を穏やかにさせる大きな力があると思います。
安らぎのある未来にするためには，自然を大切にしなければならないでしょう。
生活を快適にしてくれる科学や技術に頼っていては本当の安らぎは得られません。
これからも“こもれび”が私たちをやさしく包み込んでくれることを願います。
この若葉の小路のように……。

2016 愛媛大学教育学部附属中学校研究報告集　第48号

平成29年２月

発行者　愛媛大学教育学部
〒790-8577　松山市文京町３番
TEL 089-927-9371
愛媛大学教育学部附属中学校
〒790-0855　松山市持田町１丁目５－22
TEL 089-913-7841　FAX 089-913-7842

印刷所　株式会社　松栄印刷所
〒790-0003　松山市三番町７丁目９－２
TEL 089-941-3334　FAX 089-933-7911

表 紙 作 品：絵画（水彩）「こもれび～若葉の小路～」　３年　高橋あずさ
中表紙作品：絵画（水彩）「章光堂の横に堂々とそびえる木」　１年　村瀬　あみ

